

# モビリティの中で場所を捉え直す

——農村に移住した若者のモビリティ実践と場所への帰属——

金 磐石

本研究では移動する主体が地域社会の境界を越えた身体的な移動の中でどのように場所を捉え直し、場所への帰属の感覚を再構築するかを検討する。

従来の都市・地域社会学における移住・移動研究は、移動する主体がどのように地域コミュニティに参入し、地域住民とつながりを形成するかという問題に焦点を当ててきた。しかし本研究ではモビリティ研究の議論を踏まえ、身体的移動と場所との関係に着目することで移動する主体の帰属の感覚を捉え直す視点を提示した。

こうした視点から、本研究では韓国南部の南海郡に移住した若者たちの移動の実践と場所の感覚を分析した。地域以外への移動の経験は一方では地域への帰属を更新する契機となる。しかし他方では地域以外へと活動の領域を広げることで地域への帰属を相対化する契機ともなる。そこから本研究では移動する主体が流動的で両義的な帰属の感覚を形成していることを明らかにした。

## 1 問題設定

### 1-1 地方への移住・移動に対する関心の高まり

2010年代以降、日本と韓国<sup>1</sup>では地方へ移住・移動する人々への関心が高まりつつある。特に高齢化や人口減少で衰退している地方を活性化させるため、地域活性化の担い手として都市から移住者を誘致しようとする施策が政府や自治体によって活発になされている。また地方での余裕のあるライフスタイルへの憧れと、テレワークやワーケーションのようなモバイルな働き方の普及から、地方へ実際に移住・移動する人々の動きも続いている。また地方に移住して定着する「田園回帰」(日本)や「帰農帰村」(韓国)だけでなく、定住せずに都市と地方を行き来しながら活動するライフスタイルに注目が集まっている。

こうした背景から近年の都市・地域社会学の分野においては移動する主体への関心が高まっている。従来の地域研究が一つの地域に定住する住民を中心に地域社会を捉えてきたという反省から、移動する諸主体の活動が地域社会をいかに変化させるかという問題について議論が行われている。特に都市社会学会、地域社会学会、村落研究学会などでは、学術大会や学術誌を通じて移動する主体と地域社会をめぐる様々な議論が展開されつつある(福田編 2020; 地域社会学会 2023)。

近年の議論の中では、モビリティーズ・パラダイム(Urry 2007; Sheller and Urry 2006)の理論枠組みから、移動する諸主体の実践とライフスタイル、社会関係資本を分析しているものも散見される。例えば近年注目されつつある「関係人口」を学術的に定義する作業に取り組んでいる田中輝美(2023)は、モビリティの観点から関係人口の移動のパターンを検討し、彼らが地域社会にもたらしうる新しい変化の可能性について論じた。また田所承己(2017)はまちづくりの現場において地域住民と移動する諸主体の様々な出会いの中で創発する場所生産の実践を分析した。

## 1-2 地域社会学における移住・移動研究の「地域コミュニティ・バイアス」

このように地方への移住・移動に注目する近年の議論は、モビリティーズ・パラダイムを援用し、従来の定住主義的な考え方を乗り越えようとする問題意識を前面に出している。しかしそれらの研究は依然として移動する主体の活動を主に「地域コミュニティ」とのつながりという観点から捉えていることで限界を持つ。

第一に、従来の地域社会学における移住・移動研究は地域社会の基本構造と地理的境界をア priori に捉え、移動する諸主体の実践を地域社会への適応と参入という単線的な過程として把握する傾向があった。これらの研究は、移動する人々の活動によって地域社会の基本構造がどのように維持・存続されるか、移住者・移動者がどのように地域社会に参入し、地域住民と協同し、共生するかという問題に焦点を当てている（徳田 2023: 17）。

しかしモビリティーズ・パラダイムは時空間的に安定しているものとして捉えられてきた境界が再編される過程に着目し、「領域としての空間」ではなく「関係としての空間」に注目する（吉原 2022: 39）。それを考えると、移動する人々が「よそ者」としてどのように地域社会に適応し、参入するかという問題ではなく、地域を出入りする中で、地域社会の境界を越え、地域コミュニティに収斂されない新しい活動の領域を構築する過程を検討する必要がある。

第二に、従来の移住・移動研究は移動する主体の様々な実践を「地域活性化」という枠組みに収斂させる傾向がある。移住・移動研究の多くは地域おこし協力隊や関係人口のように、地域社会に関わり、地域を活性化させる活動の事例に注目している。そして移住者・移動者が地域住民と積極的につながり、地域社会に参入し貢献することを前提として、さらには規範として捉えている（牧野 2021: 107）。言い換えれば、地域活性化に役にたつ、いわゆる「あるべき農村移住」のイメージを前提としているのである（佐藤 2023）。ここでモビリティは、定住せずに都市と地方を行き来する関係人口が地域社会と関わり続ける可能性（田中 2023）や、移動する諸主体が地域社会に交流の場をつくる契機（田所 2017）として位置付けられる。

しかし移住者自身のライフヒストリーに着目した研究（井戸 2020; Klien 2020; Kurochkina 2022）は、移住者の活動が、結果的には地域活性化に寄与するものの、地域活性化という目的には収まらないライフスタイルや価値観の実現、生存戦略として意味を持つと指摘している。つまり移住者は、一方では地域社会と協力し様々な活動を行っているが、他方では自己実現を優先し、地域社会とは緩やかな関係を保ちながら流動的なアイデンティティを形成しているのである<sup>2</sup>。それを考えると、地域社会への参入や地域活性化という前提を括弧に入れておいて、移動する主体の流動的な実践に注目する視点が必要となる。

移住・移動研究のこのような「地域コミュニティ・バイアス」は、従来の地域社会学の傾向ともつながっている。そこでは地域社会を地域住民や地域コミュニティと同一視し、地域の空間的次元を度外視したまま、社会的諸関係や組織の問題にのみ焦点を当ててきた（武岡 2017）。こうした視点は移動する主体の流動的な立ち位置には十分に注意を払っておらず、移動する主体の活動を早急に地域住民とのつながりや地域社会への貢献という次元に収めてしまう。

それに対して武岡暢（2017）は、地域社会を地域コミュニティの次元から一旦切り離し、地域の空間性に着目し、移動する諸主体が様々な活動の中で地域の空間と関係を形成する局面に焦点を当てる新しい視点を提案する。本研究とは分析のレベルを異にするが、武岡の議論は地域内の社会的諸関係とは別の次元として存在する空間性に注目することで、移動する主体の実践を分析するための新しい視座を提供している。

### 1-3 本研究の目的と構成

こうした問題意識を踏まえ、本研究では従来の地方への移住・移動研究で相対的に注目されてこなかった空間・場所の次元に着目する。特に移動する主体が地域社会の境界を越えた身体的な移動の中でどのように場所を捉え直し、場所への帰属の感覚<sup>3</sup>を再構築するかを検討する。

第2節ではモビリティ研究の分野におけるモビリティと場所に関する議論を参照し、移動する主体の場所の感覚を分析するための理論枠組みを提示する。そして第3節以降では韓国南部の南海郡で活動しているローカルクリエイター・グループ K の移動の経験进行分析する。それを通じて移動する人々と場所が両義的な関係にあることに着目し、そこから生まれる流動的な帰属の感覚を検討する。

## 2 モビリティと場所の弁証法的関係

### 2-1 定住主義と遊牧主義の二分法を越えて

場所に対する古典的な捉え方（Relph 1976; Tuan 1977）では、一つの場所に根を下ろすことを人間存在の安定的な前提として捉え、移動を場所から根こそぎにする不安定で逸脱的な状態として問題視する。そして現代社会において人々の移動性が高まることで、人々の場所の経験が不安定で通り一遍になっていると指摘している。

一方、グローバリゼーションによって国家間の境界が崩され、人とモノ、資本と情報が絶え間なく流れている流動的な世界の中で、人間の社会的関係と経験が根本的に脱場所化されているという主張も提起されてきた（Meyrowitz 1985; Giddens 1991）。また、固定性を権力の戦略として、その反対にモビリティを進歩と自由、抵抗のための戦術として捉え（de Certeau 1974=2021）、固定性や愛着ではなくモビリティと流動性を強調する遊牧的な実践に注目する論者もいた（Deleuze et Guattari 1980=2020）。

「定住主義」と「遊牧主義」（Malkki 1992）とも称される以上の二つの観点は互いに対極にあるが、実際には両方ともモビリティと場所を相互に対立するものとして捉える考え方を前提としている。言い換えると、移動を停止と対立する、正常性から逸脱した状態として捉える観点を共有しつつも（Adey 2006: 77）、定住主義では移動を場所に根ざしている人間存在の根本的な条件を脅かすものとして捉えており、逆に遊牧主義では移動が持つ解放的な可能性に期待を寄せているのである。

しかし Doreen Massey（1994）はそうした二分法的な考え方に対して疑問を呈している。Massey は場所が歴史的に構築される固有性を持つという本質主義的な場所観を批判する。同

時にモビリティと流動性を肯定し、場所への愛着や固定性を反動的なものとして捉える考え方も問題を提起する。Massey は、人々が場所への愛着を形成する必要性を認めつつも、空間を横断して広がる様々な関係とネットワークが接合する結節点として場所を再定義している。そして場所を特定の位置、活動、実践を通して構築された、ローカルからグローバルにわたる配置 (constellation) やネットワークから構築される透過的な実体として再定義している (Salazar 2023: 583)。

そうした問題意識の延長線上から、モビリティ研究では、人・モノ・情報の無制限的で流動的な移動に焦点を当てるだけでなく、移動を媒介し条件付ける不動性 (インモビリティ、immobility) との関係からモビリティを捉え直す視点をとる (Hannam et al. 2006; Adey 2006)。ここでモビリティとインモビリティは船舶の係留 (mooring) に比喻される。海の上や港に停泊している船は波に沿って絶えず動いているが、同時に停泊した地点を中心に漂うことなく留まっている。それと同様に、モビリティは境界を越える流動的な状態として存在するが、同時に移動しない人・モノ・インフラ・物理的環境との関係を通して媒介され、形づけられるのである。要するに、モビリティ研究はモビリティとインモビリティとの関係に着目し、社会的なものの成り立ちを捉え直す視点を指向する。

## 2-2 モビリティと場所への帰属

こうした観点から、モビリティを人と場所の関係を危うくするものではなく、場所そのものの構成要素として捉える必要がある。つまり、多様なスケールにわたる移動の中で場所への帰属の感覚が構築される局面に注目する必要がある。

Per Gustafson (2001) は、James Clifford (1997) が提示した「根 (roots)」と「経路 (routes)」のメタファーを中心に、モビリティと場所への愛着との関係を検討した。Gustafson の解釈によると、「根」としての場所は情緒的愛着と紐帯、コミュニティへの強い所属感を中心に認知されるのに対して、「経路」としての場所はモビリティや旅行の中で新しい場所と文化を経験する一連の過程の中で認知される。そして Gustafson は、モビリティと場所への愛着は必ずしも相互排他的なものではなく、多様なモビリティの中で場所への愛着が様々な形で構築されると指摘した。

Mia A. Falov ほか (2013) はモビリティがどのように場所への帰属の感覚を形成するかを検討した。Falov ほかはモビリティのリズムと時間性、モビリティに必要な資源とアクセシビリティ、そしてモビリティに伴う意味の構造がどのように場所への帰属の感覚を構築するかを分析した。また、Hazel Easthope (2009) は場所とモビリティの弁証法的関係の中で個人のアイデンティティが複合的に構築されると指摘した。Easthope は場所との安定的な関係と移動の経験は相互に対立するものではなく、居住と移動、安定性への志向と変化への志向が絡み合う中で重層的なアイデンティティが形成されると指摘した。

モビリティと場所の関係に対する議論をレビューした Noel Salazar (2023) は、場所を固定性 (fixity) や不動性 (immobility) と関連付ける従来の考え方に疑問を提起した。そして場所がモビリティを通して広がり、つながり、移動すると主張した。一方、モビリティは、遊牧主義的な言説でよく言われるように絶え間なく流動し脱領土化されるのではなく、特定の場

所につながり、場所によって媒介されると指摘した。こうした「場所のモビリティ (mobility of place)」と「モビリティの場所化 (emplacement of mobility)」という二つの軸を中心に、Salazar はモビリティと場所との相互構築的関係を強調した。そしてその中で帰属の感覚が再構築されると主張した。

以上をまとめると、モビリティは個人と場所との安定した関係を解体するものでもなければ、場所の束縛から個人を解放し無限の自由を与えるものでもない。むしろモビリティと場所は相互構築的な関係にあり、その中で流動しながらも同時に安定している複合的な帰属の感覚が形成される。こうした視点から、移動する人々がどのように(複数の)場所と関係を持ち、帰属の感覚を形成し、複数の時空間にわたって生活と活動の領域を構築するかを見る必要がある。

### 2-3 身体的モビリティと「ホーム」の構築

場所を構築するモビリティには身体的モビリティからオンライン上のバーチャルモビリティ、さらには想像のモビリティまで多様なスケールが存在する (Urry 2007; Milbourne and Kitchen 2017)。その中でも本研究では移動する主体の身体性の次元に着目する。ここでは場所を中心に行われる身体的実践と遂行性がどのように場所への帰属の感覚を構築するかを検討する。

David Ralph と Lynn A. Staeheli (2011) は、移住者が「ホーム」をどのように認知するかについて考察した。著者たちは「ホーム」が特定の空間に縛られているのではなく、社会的関係、地域コミュニティ、風景、モノのネットワークの中で複合的に構築されるものであると指摘した。また場所があらゆる実践の中で生産され、構築される局面に着目し、時間と空間を越えて人と場所を結ぶ「ホーム」の構築過程を検討した。そして移住者が出身地と移住先にわたる複数の時空間の中で重層的で複合的な帰属の感覚を構築していると主張した。

一方、Hernan Cuervo と Johanna Wyn (2017) は帰属のパフォーマティブな側面に注目した。オーストラリアの農村に住んでいる若者の事例を中心に、若者が流動的でモバイルな生活の中でいかに場所と関係を持ち、場所に意味を与えるかを検討した。場所の意味は多重かつ競合的であり、社会的諸関係の中で構築されるという観点 (Massey 1994) から、著者たちは社会的関係と実践の中で場所への帰属の感覚がどのように形成されるのかを分析した。そして著者たちは、場所への帰属は単に一つの場所に長期間住んできたという事実から自然に作られるものではなく、日常の平凡な実践の中で常に再構築されるものであると主張した。

要するに、場所への帰属の感覚は単に特定の場所で長期間居住することから自然に形成されるのではなく、複数の場所を行き来しながら行われる身体的実践と遂行の中で再構築されるものである。こうした知見はモビリティによる社会的ネットワークの広がりにも注目する視点を乗り越え、身体的モビリティの中でいかに場所が経験され場所との関係が再構築されるかに注目する必要性を示唆する。

## 2-4 本研究の分析視角

以上の議論を踏まえ、本研究では移住・移動する主体が身体的移動の中で場所を経験し、場所への帰属の感覚を形成する過程に注目する。本研究は移住者の社会的ネットワークと地域コミュニティへの関わりに着目した従来の移住・移動研究の視点と距離をとる。そして移住・移動する主体が空間としての地域と関係を形成し、その中で場所への帰属を構築する過程を検討する。

また、本研究では場所を安定的なものとして、モビリティを流動的なものとして二分法的に捉える従来の視点を乗り越え、モビリティが場所と関わる中で生まれる安定性と、場所がモビリティを通じて相対化される流動性に着目する。

ここではモビリティとインモビリティの関係を船舶の係留（mooring）に比喩した先行研究の議論を参照し、人々が移動の中で場所と関わる過程を**モビリティの求心力と遠心力**という二つの局面に分けて分析する。**モビリティの求心力**とは、海の上にある船が浮遊しながらも停泊している地点に縛られているように、人々が常に移動しながらも移動の結節点となる特定の場所を中心に帰属の感覚を形成する局面を指す。一方で**モビリティの遠心力**とは停泊している船が波に沿って常に動いているように、人々が特定の拠点に身を置きながらも移動を通じて場所の感覚を広げる局面を指す。

こうした視点から本研究では農村へ移住・移動する若者が居住と移動の経験の中で両義的で流動的な帰属の感覚を形成する過程を検討する。

## 3 研究対象及び方法

モビリティと場所の関係に対する以上の議論を踏まえ、本研究では韓国慶尚南道南海郡に移住して活動しているローカルクリエイター<sup>4</sup>・グループ K のメンバー全員へのインタビュー調査の内容を分析する。それから、メンバーたちが移住後も続く日常的な移動の中でいかに場所を経験し、帰属の感覚を形成するかを検討する。

### 3-1 研究対象地域：慶尚南道南海郡

南海郡は韓国の南部にある、陸地に隣接した島である。ソウルから約 310km 離れており、バスでは約 4 時間半程度かかる距離にある。2023 年 11 月現在、全体人口 40,850 人の中で 65 歳以上が 16,878 人で 41 % に達しており、高齢化と若者の流出によって人口危機が高まっている<sup>5</sup>。韓国南部の代表的な海洋観光地として観光業が発達しているが、それ以外の産業基盤はほとんど発達していない。

南海郡では、2010 年代後半までには自治体からの移住支援が活発に行われていなかった。その中で 2010 年代中盤以降、郡内のあらゆる地区に若いアーティストや活動家、起業家が自発的に移住し、芸術やまちづくり、観光業などの分野で活動を立ち上げた。その後、若者の活動が地域の内外に知られ、自治体が若者当事者との連携のうえ、本格的に若者の活動を育成するための体制を整えた<sup>6</sup>。特に産業基盤の不在により就職先が少ない地域の特性を踏まえ、若者の起業を支援したり、地域資源を活用して制作活動をする若いアーティストを支援した

り、コワーキングスペースを作りワーケーション移住者を積極的に受け入れたりしている。

南海郡の事例は、自治体や地域コミュニティの主導で移住支援がなされたのではなく、移住者の動きが先に存在し、その後自治体が支援体制を整えたケースである。そうした点で移住者の流入とそれに対する地域社会の対応との間で展開されるあらゆる社会的ダイナミックスと地域社会の変化を検討するための格好の事例である。

### 3-2 研究対象：ローカルクリエイター・グループ K

グループ K の出発点は、2017 年末に南海郡出身のドキュメンタリー監督の G が知り合いの人々を集めて南海を旅行しながら地域暮らしの可能性を探索するドキュメンタリープロジェクトを行ったことである。ドキュメンタリーの撮影を始めた当初、監督と参加者たちは実際に南海に移住することは全く考えなかったという。しかし南海を旅行し、その美しい自然風景とゆったりとしたライフスタイルに深い印象を受けた参加者たちの一部が実際に南海に移住することを提案した。参加者たちは、現地では家賃も物価も安いから共に生活費を払えば大きな負担にならないと判断し、2018 年初頭に海沿いにある古い家屋を賃貸して移住した。

グループ K の事例で注目すべきことは、メンバー全員が同時に南海に移住したのではなく、一部のメンバーが南海に移住して現地での活動を主導し、ほかのメンバーはソウルで生活しながら南海での家賃と生活費を一緒に払い、定期的に南海を訪問して活動する形で団体を運営していることである。南海に常駐するメンバーは前からデザインや芸術文化関連の仕事をしてきた人々であり、会社を辞めたりフリーランサーとして働いたりしていたため、本格的に南海に移住することができた。一方、ほかのメンバーはソウルで会社や学校に通っていたため、南海に完全に移住せず既存の仕事の続けながら週末に南海を訪問する形で活動した<sup>7</sup>。また常駐するメンバーも活動上の必要によってソウルやほかの地域を行き来しながら活動している。

こうした点で地域の内と外を行き来する移動の経験はグループ K の日常生活にとって重要な部分を占めている。これは移住した後も続いて行われる多様な移動の経験の中でいかに場所との関係が変化し、再構築されるかを分析するために興味深い事例を提供している。

### 3-3 研究方法

本研究は 2021 年 5 月から 7 月まで、グループ K のメンバー 7 人全員に対して行ったインタビュー調査に基づいている。筆者は 2018 年にソウルで開催された、地方移住に関するフォーラムでグループ K のメンバー A と F に初めて出会った。その後、南海とソウルを行き来しながら活動するグループ K の事例に興味を持ち、メンバー全員にインタビューへの参加を要請し、承諾を得た。それから、南海に常駐しているメンバー 4 人と、ソウルから南海を行き来するメンバー 3 人に対して調査を行った。インタビューを行った 2021 年には新型コロナウイルス感染症の流行によって国家間の移動が制限されていたため、インターネット会議プラットフォームである Zoom を通じて調査を行った。インタビューは 1 回に 1~2 時間行い、1 対 1 インタビューを基本としたが、E と F は 2 人同時にインタビューを実施した。インタビュー調査の前に研究手続きに関して説明をし、調査の進行と録音、そして資料の活

用について同意を得た。

表1 インタビュー参加者の概要

名前	性別	年齢	移住前の活動	グループ K 加入時点、 居住地域
A	男	30代初	文化企画、劇作、演劇演出	最初から南海に移住
B	女	20代後	デザイナー	最初から南海に移住
C	女	20代中	デザイナー	2020年にアーティスト・レジデンスに参加してから加入
D	女	30代中	コミュニティ活動、文化企画	最初の南海旅行に参加、3年目の2020年に移住
E	男	30代初	居住問題研究所の職員	最初から現在までソウルから定期的に行き来しながら活動
F	女	30代初	文化企画	最初に1年間南海に居住してその後ソウルに復帰、現在も南海を定期的に訪問している
G	女	30代初	NPO活動、ドキュメンタリー監督	最初に現地でグループ K の活動を手伝ってその後ソウルに復帰。現在は南海に住んでいる

(注) 調査を行った2021年当時の情報

インタビューでは南海への移住過程から活動内容、メンバー同士の関係、日常生活、そして移動の経験について問うた。一般的な質問から始めて、参加者が自由に自分の経験を語り、その話が収束した段階で研究関心と語りの内容を踏まえた追加質問をして議論を掘り下げた。インタビュー参加者の概要は表1の通りである。

## 4 モビリティの実践と場所への帰属

本節ではグループ K のメンバーが南海の内と外を行き来するモビリティの実践の中で南海という場所に対する帰属の感覚を構築する過程を分析する。

### 4-1 モビリティの求心力：移動の中で「ホーム」を作る

南海に常駐するメンバーは活動に必要な資料を集めたり自分たちの活動を広報したりするため、1~2か月に1回のペースでソウルを訪問する。このようにソウルと南海を行き来する中で、常駐するメンバーはソウルとの関係の中で南海という場所を、そして自分たちの南海暮らしを捉え直す。

ソウル来ると何日間かはそこそこに過ごすことができる。楽しくていいけど、一週

間ぐらいたつとやはり少し大変だよね。経済的な問題もあるし、社会的な関係網がすごく広いから、人も多いし、車も多いし、様々な物事があるソウルが煩わしく感じられてね。これは大変だなと感じられる時期が訪れるよね。(中略)そして南海に帰るとなんか癒される気がするよね。静かで、自分の空間も広がって、やはり家が広いから。(中略)ソウルでの日程が終わって南海に行く则自分の空間が広がって、なんか開けていて、余裕があって、周りに比較対象がないので他人との比較から自由になって、そのようなポジティブなことがまた感じられる。そしてまた南海での生活が続くと日常生活の問題が再び浮かび上がって、その中で困難を感じてしまう。(中略) 南海から遠く離れたことが南海を改めて知覚する契機を作ることもあるよね。ソウルも同じで、ソウルから離れるとソウルを別の視点から知覚することができるし。

(Aへのインタビュー、2021年6月21日、日本語訳)

Aはドキュメンタリー撮影の時、南海の風景に惹かれ、誰よりも意欲的に移住を推進していた人物であった。しかしAは南海に移住して4年が経ち、南海の風景に慣れてしまい、日常の不便や様々な問題のため、南海に対して持っていた愛着が薄くなったと語った。その中で、定期的にソウルを訪問する経験はソウルとの対比から南海を改めて知覚する契機をもたらす。南海での日常生活が続くと生活上のあらゆる問題に向き合い、窮屈さを覚える。そしてソウルに行くに煩雑なソウルとは全く違う静かな南海が懐かしくなる。そうした点でソウルと南海を行き来するモビリティの実践は場所への感覚を更新するルーティンとして意味を持つ。

一方、ソウルやほかの地域に行って南海に帰ってくる時、陸地と南海郡をつなぐ南海大橋を通りながら南海に「帰ってきた」ことを実感する経験は、今住んでいる南海が自分たちにとって「ホーム」であることを知覚する契機となる。

CはグループKが開催した地域体験プログラムへの参加をきっかけにグループKに合流したメンバーである。就職先が決まっていない不安定な状況で、現実逃避のような形でグループKに加入したCは、最初は南海にいつまで滞在できるのか分からず、南海での生活になかなか馴染めなかったという。だが、南海で過ごす時間が長くなり、活動が積み重なる中で、だんだん南海に愛着を持つことができたという。その中で南海と他の地域を行き来する中で、南海が自分の本拠地であると感じるようになったという。

南海の家は、活動の拠点でもありますがけど、拠点よりも「ホーム」の意味が大きいですね。ソウルに行って帰ってきたり、昌原〔Cの実家〕に行って帰ってきたりすると、ただ行き来するよりはどこかに行って南海に「帰ってくる」感覚があるので、私にとっては「ホーム」としての意味が大きいですね。

(Cへのインタビュー、2021年7月1日、日本語訳、括弧内は筆者補足)

Cにとって南海は単に活動の拠点であるだけでなく、自分の「ホーム」、そして「本拠地」として認知されている。ほかの都市と往来する時、「ただ行き来する」のではなく「どこかに行って南海に帰ってくる」感覚を覚えたとき、Cはいう。このように他の場所に行って「帰っ

てくる」移動の経験が積み重なる中で、南海を自分の「ホーム」として認識する感覚が再生産されるのである。

一方、ソウルから南海を定期的に訪問するメンバーもソウルと南海を日常的に行き来する中で南海を自分のホームとして認識している。EはグループKが初めて南海に移住した時、Aとともに移住への意欲が誰よりも強かった人物であったが、個人的な事情のためソウルで仕事をしながら南海を定期的に訪問することを選択した。

ほかの人たちが「南海に行って何する？」と聞いたら僕は「家に帰って休むことは当然だろう。じゃ、あなたは家に帰って何する？」と反問しますね。僕にとってはもう一つの家ですね。(中略)南海も僕の家ですし、ソウルの部屋も僕の家ですし、実家も僕が生まれ育った家ですし。(中略)ですので別に混乱したりすることはないですよ。ここに来て寝る時に寝たり、シャワーを浴びる時に浴びたり、ご飯の時にご飯食べたりすればいいじゃないですか。(中略)違うところだと、ソウルは毎日職場に通いやすい、職場と近い家だとすれば、ここは海水浴しやすい家、くらいかな。機能が少し違うだけです。(Eへのインタビュー、2021年7月17日、日本語訳)

ソウルから南海までは約310km、バスでは4時間半程度かかる距離にある。しかしEはほぼ毎週南海を来訪しながらそのような長距離の移動に馴染み、ソウルと南海を行き来することが日常の一部として感じられるようになった。また南海で休みを取り、他のメンバーと遊び、現地の活動を手伝う生活にも馴染み、南海を自分のもう一つの「ホーム」として捉えるようになった。このように移動の経験が日常の一部として定着する中で、Eはソウルと南海にわたって新しい帰属の感覚を構築している。

#### 4-2 モビリティの遠心力：移動を通じて場所の感覚を広げる

しかし日常的に行われるモビリティの経験は場所への帰属の感覚を再確認する契機ともなるものの、逆に居住の感覚を地域以外へと広げる契機ともなる。メンバーたちはソウルと南海を行き来する4時間半の移動時間に慣れていく中で、自分の空間的範囲が広がることを経験したと語った。

空間を認識する範囲が広がった感じはある。例えばさっき移動に関して話したけど、ソウルから南海まで4時間半から5時間かかるけど、この5時間という距離、時間が、ソウルにいる友達が遊びに来ると遠すぎるというよね。時間がかかりすぎると。しかし同じ移動時間と同じ距離が、僕にとってはそれが日常的にしなければならないことだから、その分空間的範囲が広がったよね。5時間かけてソウルまで行っても大丈夫だと。

そこで感じるのは、別に南海じゃなくてもほかのどの地域に行っても大丈夫だろうということ。ソウルとほかの地域を行き来しながら生活することに別に負担がない。やはり南海暮らしを経験したからこそそうかもしれないけど。ソウルから1~2時間行っても全部田舎じゃない？京畿道を越えて忠清道に行くとはほとんど農村地域だし。そんな地域に住むとむしろソウルと近くていいんじゃない？このように空間を認識する範囲が広

くなったよね。

(A へのインタビュー、2021 年 6 月 21 日、日本語訳)

ソウルと南海を繰り返して行き来する経験の中で A は、一方では自分が住んでいる南海をあらためて知覚し、場所への愛着を再確認したが、他方では長い時間の移動に馴染んできて、南海ではなくほかのどの地域でもソウルを行き来しながら暮らすことができると考えるようになったという。言い換えると、移動するライフスタイルそのものに馴染んできたのである。

B もまたソウルから遠く離れている南海で暮らした経験があるので、もしも南海生活をやめてソウルに行っても、将来いつでも迷わずにほかの地域に移住することができるだろうと語った。

もしも今住んでいる南海の家がなくなるとしたら、その後私がソウルで住んでいるといつか南海が懐かしくなったり自然の風景が見たくなったりするかもしれませんよね。やはり私がここで 3 年以上暮らしたからです。そんな時には迷わずに一人でいつでも移住して暮らすことができるという心構えを持つようになりましたね。南海暮らしを経験しなかったとしたら、誰かが「地方に移住してみようか」と言ったら「私は絶対できない」といったかも知れないですけどね。どんな感じなのか分かりますか。[笑いながら]そういうことがありますよ。私は実際経験しましたので。

(B へのインタビュー、2020 年 6 月 25 日、日本語訳、括弧内は筆者補足)

B はグループ K の不安定な状況とともに、個人的にはもっと専門的な勉強をしたいという思いから、南海暮らしを続けられるかという問題について確信をもって応えられないままであった。しかし 4 年弱の期間、南海とソウルを行き来しながら活動した経験があるため、もし南海での活動をやめてソウルに戻っても、その後いつでもソウルを離れてほかの農村地域に移住することができる心構えを持っていると B は語った。

一方、ソウルと南海を繰り返して行き来する中で南海が自分のもう一つの「ホーム」になったと語った E は、二つの「ホーム」にわたっている今のライフスタイルから、韓国のあちこちに複数の拠点を作ることにについて想像していた。

ここで思ったのは、多くのお金を払って [地価の] 高いところに一つのマイホームを購入するよりは、どうせ我が国 [韓国] はそんなに広くもないし、ソウルにずっと住んでいるよりはあちこちに家を作ろうと。人々を集めて費用を分担して家を共有するとあちこち巡りながら楽しく過ごすこともできるんじゃないですか。色んな風景を楽しむこともできるし。それが僕のアイデアですね。

(E へのインタビュー、2021 年 7 月 17 日、日本語訳、括弧内は筆者補足)

E は住居問題を研究する研究所で働いており、オルタナティブな居住生活に関心を持っていた。そこで数年間ソウルと南海を行き来しながら生活した経験は、複数の場所にわたって生活を営むライフスタイルへの想像力を刺激した。ソウルと南海にわたって日常生活を営む経験の中で、E は一方では南海という場所への帰属を再確認しながらも、他方ではソウルで

も南海でもない第三の場所への移動を常に欲望しているのである。

#### 4-3 考察

第2節で検討した通り、人と場所との関係はモビリティの遂行の中で常に再構築される。多様なスケールのモビリティは場所と場所をつなげ、その中で場所の意味を再構築する。そしてその中で場所に対する個人の帰属の感覚も改めて構築される。

グループKは南海に常駐するメンバーとソウルから来訪するメンバーの移動の軌跡が交錯する中で、複合的な場所の感覚を構築してきた。まず繰り返される移動のパターンは場所を改めて知覚するリズムを作る。南海に常駐するメンバーはソウルに来訪する経験を通じて、これまで慣れていた南海という場所をソウルとの対比から改めて知覚し、煩雑なソウルとは違う南海の広い空間の魅力を感じている。また繰り返される移動の中で「行って帰ってくる」という移動の感覚を覚え、南海が自分の「ホーム」であることを再確認する。一方、ソウルから行き来するメンバーも、最初は日常から離れた憩いの場所であった南海が、もはや日常の一部として感じられるようになったという。要するに、グループKのメンバーたちの移動の経験は、ただ境界を越えて無限に広がるのではなく、その結節点となる南海という場所へのつながりを形成する。言い換えると、移動の中で場所への求心力が働いているのである。

しかし一方では移動の経験の中で、場所を知覚する範囲が広がり、南海（そしてソウル）という特定の場所に縛られない流動的な帰属の感覚が形成される。メンバーたちは一方では移動を通じて南海という場所への愛着を再確認することができたと言いつつも、他方では遠い距離を移動するライフスタイルそのものに馴染み、南海ではなくほかの地域でもソウルを行き来しながら暮らすことができるだろうと語った。要するに、南海とソウルを行き来する移動が繰り返される中で、南海という場所に拠点を置きながらも常に他の場所へと広がる遠心力が働いているのである。

モビリティの実践は場所に対する複合的な感覚を形成する。一方ではモビリティの実践の中で空間的な範囲が広げられながらも、他方ではそうしたモビリティが繰り返される中で何らかのパターンを作り、その中でモビリティの結節点になる場所を中心に帰属の感覚が強化される。逆に言えば、特定の場所を中心に厚く形成された帰属の感覚がモビリティの経験の中で相対化される。このように移動の中で特定の場所へと引き寄せる求心力と他の場所へと広がる遠心力が共に働く中で、移動する主体は流動的で両義的な帰属の感覚を形成する。

場所への愛着と帰属の感覚は引き続きモビリティの中で動きと停止、あるいは移動と居住の交錯を通じて絶え間なく再構築され、交渉されるのである。そうした観点からみると農村に移住した若者は、地域に「根 (roots)」を下ろしながら自分の「ホーム」を作るのではなく、多様な移動が交錯する「経路 (routes)」としての場所の上に係留する (mooring) ことによって「ホーム」を作っているのであると言えよう (Gustafson 2001; Hannam et al. 2006)。それを通して一方では特定の場所を自分の活動の拠点でアイデンティティの基盤となる「ホーム」として認知しながらも、他方では絶えず他の場所への移動を欲望し、実践しながら活動と生活の範囲を地域以外へと広げるのである。

## 5 結論と今後の展望

本稿では、移動する諸主体の社会的関係と地域コミュニティへの参入に焦点を当ててきた既存の移住・移動研究の限界を乗り越え、身体的モビリティに着目し、移動する主体が移動の中でいかに場所への帰属の感覚を形成するかを分析した。

まず本研究では、定住主義と遊牧主義の二分法を乗り越え、固定性と移動性の弁証法的関係に注目することで、モビリティとの関係の中で場所を捉え直そうとするモビリティ研究の視点を検討した。また身体的実践が場所への帰属を形成し、アイデンティティの基盤としての「ホーム」を構築するという知見から、身体的実践としてのモビリティが繰り返される中で場所への帰属の感覚が形成される過程を捉えようとした。

こうした知見から、本研究では韓国慶尚南道南海郡に移住した若者の移動の経験と場所の感覚を分析した。それを通して移住後も引き続き移動の経験が、一方では地域への愛着と帰属の感覚を更新する契機となるものの、他方では地域以外へと活動の領域を広げることによって地域への愛着を相対化する契機ともなることを指摘した。そして移動する主体が地域の境界を越え、流動的で両義的な場所の感覚を形成していることを明らかにした。

従来の地域社会学における地方移住・移動研究では、移動する主体と地域コミュニティとの関わりに焦点を当てることで、地域社会の参入・適応という単線的な枠組みを越える流動的な実践を十分に捉えることができなかった。しかし身体的な移動に着目する本研究の視点からは、一方では地域社会と関わりながらも他方では地域以外へと活動の領域を広げる、境界を越えて行われる様々な実践を捉えることができる。それを通じて地域社会への参入や貢献という目的には収まらない新しい地域活動の領域に光を当てることができると期待される。

一方、本研究は実際にモバイルなライフスタイルを実践している人々の経験に焦点を当てた一方で、そのモバイルなライフスタイルを裏付ける構造的文脈については十分に扱うことができなかったことで限界を持つ。それは地域住民・地域コミュニティとの関係を一旦括弧に入れ、移動の実践そのものに焦点を当てるための選択でもある。しかし移動を裏付ける様々な構造的文脈はモビリティ研究において重要なテーマである。グループ K の事例でも見られるように、アーティストやフリーランサーなど、モバイルな働き方を持っている人々もあれば、仕事や経済的な困難、もしくは家族の事情によって移動が制限されている人々もある。また日常的に実践していた移動的ライフスタイルが、親密性の不安やコストの高騰、社会的ネットワークの変化によって維持できなくなるケースもありうる。そうした「モビリティの格差」によって地域への帰属の仕方がどのように変化するかという問題は、今後解明すべき重要な課題である。

### 注

- 1 大前悠 (2013) によると、韓国では大きく分けて2つの時期に農村移住が大きく注目された。第1のブームは1997年の通貨危機の時期である。通貨危機のため大量の失業者が発生する中で、政府が失業者救済策の一環として都市住民の農村移住を支援し、多くの失業者が地元でUターンして農業に従事した (ユ 1998: 31)。またこの時期には「全国帰農運動本部」が創設され、エコロジカルでオ

ルタナティブな価値を追求する共同体運動として「帰農」の動きが注目された（ユ 1998: 30）。

第2のブームはベビーブーマー世代（1950～60年代生まれ）の引退時期が近づいてきた2000年代後半である。この時期には引退者を中心に農村移住に対する関心が高まった。特にこの時期には農村に移住して農業に従事する「帰農」だけでなく、農業以外に多様な活動をしながら農村で生活する「帰村」に対する関心が高まった。

一方、2010年代中盤からは若者の地方移住への関心が高まってきた。2000年代後半の帰農帰村政策は主に引退者の農村移住を支援していたが、2010年代中盤以降は若者の農村への移住と活動を支援し、彼らを通じて衰退する地域を活性化しようとする動きが目立つようになった（むら学会イルソゴンド 2019）。

- 2 牧野智和は、農山漁村に移住する若者が移住先の場所で「他でもなくここだという入れ替え不可能性」を見出し、地域の人々との人間関係から「自らと場所をめぐる流動性を打ち止める手があり」を求めていると指摘している。牧野はここで流動化が無限に進んでいる都会と、そうしたトレンドが比較的進んでいない農山漁村を対比している。そうした認識からは流動的な都会と安定している農山漁村を二分法的に捉える考え方が読み取れる（牧野 2021: 109）。

しかし日本の農村地域に移住した若者のライフヒストリーを調査した Susanne Klien (2020: 118) は、若者は農村という場所を新しいライフスタイルや働き方を実験する場として捉えており、地域コミュニティやローカリティに必ずしも感情的な紐帯を持つわけではないと指摘した。つまり、若者と農村という場所との関わりは、地域住民との「入れ替え不可能」なつながりから生み出される安定したものではなく、若者の日常的な実践によって常に流動しているものである。

- 3 個人と場所との関わり方に関する分析単位として場所への「愛着」と「帰属」がある。両者は分析的には区分されるものの経験的にはほぼ同じ現象であり（Pollini 2005）、多くの研究においても両者が区別されず使われている。

本研究では分析単位を「(場所への) 帰属の感覚」に統一するが、場所への情緒的愛着と、特定の場所に帰属している感覚の両方の意味を含む概念として使う。ただ、2節で先行研究をレビューする際、元の論文が「場所への愛着」を扱っている場合はそのまま表記した（例：Gustafson (2001) の論文）。

- 4 韓国では2010年代後半から地方の中小都市や過疎地域の活性化のため、地域の自然環境や文化的資源を用いてクリエイティブな起業活動をする「ローカルクリエイター」への関心が高まっている。特に韓国政府の「中小ベンチャー企業部」では、2020年から「地域基盤ローカルクリエイター支援事業」を新設し、地域で活動するクリエイティブな人材を本格的に育成している。
- 5 韓国の各地域でいわゆる「消滅危険指数」を計算した結果、南海郡が全国で2番目に高かったという報道が出された。
- 6 韓国において地方で活動する若者への支援は、「移住支援」という枠組みよりは、「青年活動支援」という文脈からなされている。それは、韓国の青年政策が当事者のあらゆる社会活動を育成する方向で行われてきたこととも関連している。韓国の若者政策の特徴については朴（2022）を参照されたい。
- 7 これは芸術家やデザイナーなど、クリエイティブな職種に携わっている人々の比較的高い移動性と関係している。例えば調査協力者の一人であるEは、自分はアートやデザインなど、現地で活用できる技能を持っていないため、ソウルでの仕事を辞めて南海に移住することが難しかったと語った。その代わりにEは会社の勤務日を調整して南海に定期的に訪問して活動しながら、現地の生活費や活動費を一緒に負担する形で活動に関わった。それは、職種や働き方によって移動の可能性に違いがあることを示唆する。本稿では十分に論じることができなかったが、移動を裏付ける個人的な背景や構造的な文脈の違いによって場所との関わり方がどのように変化するかも今後解明すべき重要な課題である。

## 文献

- Adey, Peter, 2006, "If Mobility is Everything Then it is Nothing: Towards a Relational Politics of (Im)mobilities," *Mobilities*, 1(1): 75–94.
- de Certeau, Michel, 1974, *L'invention du quotidien. Vol. 1, Arts de faire.* (山田登世子訳, 2021, 『日常実践のポイエティック』筑摩書房.)
- 地域社会学会, 2023, 『地域社会学会年報 35 新型コロナ禍の中の「移動」と地域社会』東信堂.
- Clifford, James, 1997, *Routes: Travel and Translation in the Late Twentieth Century*, Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Cuervo, Hernan and Johanna Wyn, 2017, "A Longitudinal Analysis of Belonging: Temporal, Performative and Relational Practices by Young People in Rural Australia," *Young*, 25(3): 219–34.
- Deleuze, Gilles and Félix Guattari, 1980, *Mille plateaux: capitalisme et schizophrénie 2.* (宇野邦一・小沢秋広・田中敏彦・豊崎光一・宮林寛・守中高明訳, 2010, 『千のプラトー——資本主義と分裂病』河出書房新社.)
- Easthope, Hazel, 2009, "Fixed Identities in a Mobile World? The Relationship Between Mobility, Place, and Identity," *Identities: Global Studies in Culture and Power*, 16(1): 61–82.
- Falov, Mia Arp, Anja Jørgensen and Lisbeth B. Knudsen, 2013, "Mobile Forms of Belonging," *Mobilities*, 8(4): 467–86.
- 福田恵編, 2020, 『人の移動から見た農山漁村——村落研究の新たな地平(年報 村落社会研究)』農山漁村文化協会.
- Giddens, Anthony, 1991, *Modernity and Self-identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Cambridge, U. K.: Polity.
- Gustafson, Per, 2001, "Roots and Routes: Exploring the Relationship between Place Attachment and Mobility," *Environment and Behaviour*, 33(5): 667–86.
- Hannam, Kevin, Mimi Sheller and John Urry, 2006, "Editorial: Mobilities, Immobilities and Moorings," *Mobilities*, 1(1): 1–22.
- 井戸聡, 2020, 「地方移動の若者の一動向——地域おこし協力隊の実践としての生き残り戦略」『愛知県立大学文字文化財研究所紀要』6: 118–106.
- Klien, Susne, 2020, *Urban Migrants in Rural Japan: Between Agency and Anomie in a Post-growth Society*, SUNY Press.
- Kurochkina, Ksenia, 2022, "Japanese Rural Resettlers: Communities with Newcomers as Heterotopic Spaces," *Asian Anthropology*, 21(1): 53–65.
- 牧野智和, 2021, 「「若者の地方移住」をめぐる語り——若者・場所・アイデンティティ」木村絵里子・轡田竜蔵・牧野智和編『場所から問う若者文化——ポストアーバン時代の若者論』晃洋書房, 98–113.
- Malkki, Lisa, 1992, "National Geographic: The Rooting of Peoples and the Territorialization of National Identity among Scholars and Refugees," *Cultural Anthropology*, 7: 24–44.

- Massey, Doreen, 1994, *Space, Place and Gender*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Meyrowitz, Joshua, 1986, *No Sense of Place: The Impact of Electric Media on Social Behavior*, New York: Oxford University Press.
- Milbourne, Paul and Lawrence Kitchen, 2014, “Rural Mobilities: Connecting Movement and Fixity in Rural Places,” *Journal of Rural Studies*, 34: 326–36.
- むら学会イルソゴンド (마을학회 일소공도), 2018, 『青年の地方移住支援政策の推進実態と改善法案 (청년의 지방 이주 지원 정책의 추진 실태와 개선 방안)』, ソウル特別市青年ハブ企画研究報告書.
- 朴在浩, 2022, 「日本と韓国における若者政策の変容——なぜ両国の政策は分岐したのか」『大原社会問題研究所雑誌』 766: 52–69.
- Pollini, Gabriele, 2005, “Elements of a Theory of Place Attachment and Socio-Territorial Belonging,” *International Review of Sociology*, 15(3): 497–515.
- Ralph, David and Lynn A. Staeheli, 2011, “Home and Migration: Mobilities, Belongings and Identities,” *Geography Compass*, 5(7): 517–30.
- Ralph, Edward, 1976, *Place and Placelessness*, London: Pion.
- Salazar, Noel B., 2023, “Mobile Places and Emplaced Mobilities: Problematizing the Place-mobility Nexus,” *Mobilities*, 18(4): 582–592.
- 佐藤真弓, 2023, 「移住者——パッケージ化される農村移住」渡邊悟史・芦田裕介・北島義和編『オルタナティブ地域社会学入門——「不気味なもの」から地域活性化を問い直す』ナカニシヤ出版, 83–106.
- Sheller, Mimi and John Urry, 2006, “The New Mobilities Paradigm,” *Environment and Planning A*, 38: 207–26.
- 田所承己, 2017, 『場所をつながる／場所とつながる——移動する時代のクリエイティブなまちづくり』弘文堂.
- 武岡暢, 2017, 『生き延びる都市——新宿歌舞伎町の社会学』新曜社.
- 田中輝美, 2023, 「新型コロナウイルス感染症の影響による国内移動 (モビリティ) の変容——関係人口を中心に」『地域社会学学会年報』 35: 20–32.
- 徳田剛, 2023, 「「移動社会」の特徴とコロナ禍によるその変質」『地域社会学学会年報』 35: 7–19.
- Tuan, Yi-Fu, 1977, *Space and Place: The Perspective of Experience*, Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Urry, John, 2007, *Mobilities*, Cambridge, U. K.: Polity.
- 吉原直樹, 2022, 『モビリティーズ・スタディーーズ——体系的理解のために』ミネルヴァ書房.
- ユ・ジョンギョ (유정규), 1998, 「帰農の現況と政策課題 (귀농의 현황과 정책과제)」『都市と貧困 (도시와 빈곤)』 34: 23–41.

(きむ ばんそく、東京大学大学院人文社会系研究科、bansoku1106@gmail.com)

## **Re-capturing Place through Mobility:** Mobility Practices and Sense of Belonging among Young Rural Migrants

*KIM, Banseok*

This study examines how mobile subjects reimagine place and reconstruct their sense of belonging to a place in their physical mobility beyond the boundaries of their local communities.

Conventional studies of migration and mobility in urban and regional sociology in Japan have focused on how mobile subjects enter local communities and form connections with local residents. However, based on discussions in mobility studies, this study builds a perspective that rethinks the sense of belonging and identity of mobile subjects by focusing on the relationship between physical mobility and place.

From this perspective, this study analyzed the mobility experiences and sense of place of young people who migrated to Namhae County in southern South Korea. On the one hand, the experience of moving outside the region provides an opportunity to renew their sense of attachment and belonging to the region. On the other hand, it is also an opportunity to relativize one's attachment to the region by expanding one's area of activity outside the region. Based on these findings, this study clarified that mobile subjects form a fluid and ambivalent sense of place and identity.